

「光は実を結ぶ」

エペソ人への手紙 5 : 8 - 9

November.17.2024

エペソ人への手紙 5 : 8 - 9 (パウロ)

Preface

先週の月曜日から水曜日まで、山ごもりとして家内と一緒に、ある方のご紹介で、CLSKクリスチャンライフ成長研究会というところが企画して下さった教職者牧師夫婦セミナーというプログラムに参加してきました。

開催場所は、静岡県裾野市にあるマリヤ修道院黙想の家というところで、正面には、太陽に照らされて赤富士となって見える富士山がドンと鎮座し、それに伴って空に広がって見える山々は壮大で、修道院の敷地は広大な茶畑に囲まれていて、正に主の造られた大自然の麗しさと清々しさを体中いっぱいを感じられるような場所でした。

そこで、ただ静かに、本当に恵み豊かな静まりの時を持たせて頂きました。

到着してから修道院の建物の中に入りますと、入ってすぐ目の前に見える壁に、「沈黙 Silence」という張り紙が貼ってあり、「おっ」となって、ちょっと圧倒されました。

建物内では、指定の場所以外でのおしゃべりは基本禁止となっており、礼拝を献げる聖堂も、履き物を脱いで入らなければならず、そこでも言葉を発してはいけません。

食事、会話は一切してはならず、黙食です。

始めは、とても窮屈に感じるのですが、神との語らい、預言者エリヤのように、神から語り掛けられるかすかな御声に聞くという意図を知り、沈黙の恵みを味わい始めますと、その場所が、とても魅力的で、恵み豊かな特別な空間に思えてきます。

食事の時には、「美味しい」という言葉も発することが出来ず、箸やスプーンと食器がぶつかる音、口に入れた食べ物を咀嚼する音にも気を付けながら食べますので、行った日の初めての夕食は、「緊張で、消化出来ないんじゃないか」と思うほどでしたが、すぐに慣れ、慣れると、料理一つ一つの味わいが深く感じられ、丁寧に咀嚼しながら、霊的「孤独のグルメ」状態に入り、至福のひとつ時となります。

祈りも、読み聞かせて下さる聖書の御言葉を黙想しながら、ただ静かに、聖霊によるキリストのご臨在という現実に関心を向けるだけで、ただひたすらに、心が、たましいが安らぐような心地よい時間となります。

そして、このセミナーを導いて下さる講師の先生方ご夫妻によるお話と、北海道から四国に至るまで、日本の色んな所から参加しに来られた限定10組

の牧師先生ご夫妻方との分かち合いの 때가、じわっと温かい感謝の時、ホッと出来る癒しの時となりました。

Part One

静まりの時、分かち合いの時、読み聞かせて頂く聖書の言葉を黙想する時、履き物を脱いで、沈黙という緊張感をもって礼拝堂に入った時、ジッと祈る時、黙って食事をする時、夫婦別の部屋になって一人で宿泊した時、富士山を見ながら妻と一緒に茶畑の中を散歩し、ラジオ体操をした時、そこで経験したすべての時間が、言い尽くせないほどの恵みに満ちた時間だったのですが、その中でも、私にとって、特に大きな祝福の気付きとなったのは、講師の先生方ご夫妻のお話を伺い、妻と、また一緒に参加した牧師先生方々との分かち合いの時でした。

講師のうちの一人の先生が、伝道師、副牧師、主任牧師として37年間教会した教会の三代目主任牧師として着任した時のご自身の働きの姿勢についてお証をして下さったのですが、

その教会はとても大きな教会で、たくさんの人が集まっているという、所謂、目に見える成果が一目瞭然である教会ゆえなのか、有能で賜物豊かで愛情豊かな前任主任牧師先生のお働きが素晴らしいものであったためなのか、ご自分が主任牧師になられてから、知らず知らずのうちに、他者と比較しながらの成果主義に陥っていたような働き方をしておられたというお話をして下さいました。

「これが出来たら素晴らしい。あれが出来なかったらダメ。伝えなくちゃ、教えなくちゃ、変えなくちゃ、変わらなくちゃ」というような心構えと、他者に負けなために貼り合う競争心のようなものが働いてしまい、肩肘張ったような状態にあられたというのです。

私はこの話を伺った時、「ああ、僕も、この先生とよく似てる境遇に置かれているなあ。でも、僕は成果主義ではないと思うし、むしろ、成果主義とは逆にいるんじゃないかなあ。成果主義ではないように心構えているつまりなんだけどなあ」と思ってしまいました。

ところが、最終日のグループ別の分かち合いの中で、同じグループのある一人の牧師先生が、(説教の中でお話しすることを許可して頂いております)「私たちの教会内には、キリストの福音ではないもの、成果主義のようなものが、意外にも蔓延っていることに気付かされました。

実は、ちょっと疲れたからなのか、先程の最後の講師の先生のお話し途中で、一番前に座っているにもかかわらず、5分ほど居眠りをしてしまいました。

すると頭がすっきりして、その後の話をじっくり集中して聞くことが出来たのですが、その経験を通して、私の礼拝説教の中で居眠りをしておられる方々を責めるような気持ちでいた自分自身に気付かされました。

居眠りしておられる方々を見る度に、『ああ、僕の説教は、この方が必要と

しているニーズに応えることが出来ていないんだ』という自分を責める思いと、『礼拝の中で居眠りするとは、なんて人だ!』と、『これが出来たら愛してあげる、あれが出来たら大切な人。それを満たしたらOK、満たせなかったらNO』というような、何かと条件のようなものを付ける成果主義に知らずの知らずのうちに陥っていて、『神は愛なり』というキリストの福音とは違う考えが、いつの間にか、自分の中に、教会の中に蔓延っていることに気付かされました」と仰って下さったのです。

それを聞き、「ああ、そういうことならば、僕自身も間違いなく成果主義であるし、成果主義的に人をさばき、物事を判断し、変えなくちゃ、伝えなくちゃ、教えなくちゃ、説得しなくちゃという肩肘張った成果主義に僕も陥っている」と、心が揺さぶられました。

そのお証を伺った後、今度は私の順番が回って来たので、こんなことを話しました。

「僕は、休暇でどこかに行った帰りの車を運転している時や、こういう特別な時を持った後に教会に帰る時など、牧会現場に復帰する時が間近に迫っていることを想像すると、怖くて怖くて仕方なくて、一人しくしくと泣いてしまうんです。この恵みのひと時が終わり、これから茨城に帰ることを思うと、正直、怖くてたまらないんです」と、その時の正直な思いを明かしますと、隣にいらっしやった牧師先生も、「私もそうです。これから大阪に帰りますが、この2泊3日の間、ずっと、帰ってからやらなくちゃいけないことが頭から離れず、期待されてはいるけれども、その期待に応えられない自分の足りなさやもどかしさに申し訳ない気持ちで、また毎日を過ごす牧会現場に帰ることに、実は心が重くなっています」と話して下さいました。

そして、そのグループの4人皆で、「ああ、僕たち皆、成果主義に陥っているね。『あれが出来なくちゃ、これが出来なくちゃ』と、自分にも、教会にも、教会の方々にも、イエス様の平安とは違うようなことを思っているねえ」と、告白し合いました。

すると皆で、イエス様が血の汗を滴らせながら祈っていた時、弟子のペテロが睡魔に耐えられずに眠りこけてしまったあの場面が思い出されて、「実は、ペテロが居眠りしていた時、イエス様が、『霊は燃えていても、肉は弱いのです』と仰ったあの言葉は、『あなたは出来ていないし、なっていない! 寝るな!』とペテロを責めるために発した言葉ではなく、『分かったでしょ。あなた自身、信仰も強いし、人間的にも強いと思っているかもしれないけれども、本当は弱いんだよ。ペテロよ、あなは、あなたの弱さに気付いて良かったね。後になって、この経験が、人様のために、隣人を愛すために、必ず役に立つからね。わたしは、そんな弱いあなたを愛しているし、わたしのいのちよりも、あなたという存在が大切だから、あなたのために、これから十字架に架かりに行きます』という、『これが出来たら、あれが出来たら』という成果主義とは

真逆の平安と慰めの語り掛けなんじゃないだろうか」と思えて来て、皆で「きっと、そうだよね」と合点をしました。

この分かち合いを通して、伝える、教える、変えるという成果主義的な力みではなく、伝わる、教わる、変えられていくというイエス様にある平安と約束に目が開かれるような思いが致しました。

Part Two

すべてのプログラムの最後に、「あなたがこのセミナーを通して得た、持ち帰るおみやげは何ですか？」という質問に対して、参加者それぞれが考え、書き留める時間がありました。

そして、その後、参加者同士互いに、「あなたのおみやげは何ですか？」と尋ね合う時間がありました。

私は、先週の礼拝説教が終わった後から、今日の礼拝の聖書箇所エペソ書 5：8、9の「あなたがたは、主にあって光となりました。光は実を結ぶのです」という御言葉がずっと頭の中を巡り、山ごもりに行く前も、行ってからも、説教準備への不安と負担があったためか、このおみやげを考えた時、エペソ書の御言葉と結び合わさって、こんな言葉が思い出され、書き留めました。

「桜は桜。桜になった。桜の花は咲く。」

めぐみ教会の前に、桜並木が広がっているからかもしれません。

桜の木が桜の木であるという事実は決して変わることなく、桜の木であるという事実が、時にかなって、美しい桜の花を咲かせるように、イエス様にあって光とされたキリスト者たちも、自分の力で光となりキリスト者となったわけではなく、神の導きによって、神の恵みによって、イエス様の愛によってキリスト者とされ、光とされ、光の子どもとされ、いのちの水が流れるほとりに植えられた木となった。

水のほとりに植えられた木は、時が来ると花を咲かせ、実がなるようになっている。

自分の足で歩いて行って、水のほとりに植わる木なんか存在しないように、神の手によって、イエス・キリストというお方に繋がり、植えられ、光となったキリスト者は、「実を実らせなければならない」という成果主義的切迫感に追い詰められるのではなく、いのちの水のほとりに植えられた木とされた、光とされたという事実が、木として、光として、花を咲かせ、実を実らせるようになっているということに気付かされました。

確かに使徒パウロ先生は、「実を結びなさい、実を結ぶべき、実を結ばなきや」とは言っておらず、「光は、実を結ぶのです」と、自然な形であらわれることを、事実を仰っているだけです。

桜の木が、桜の花を咲かせるという当たり前のことが、光とされたキリスト者一人一人皆に、実を結ぶということが起こるというわけですね。

歩んで来た過去の道のりが、歩んでいる今という時が、キリストにあって光となったという事実ゆえに、そのすべてが益となって、実を結ぶようになっているというわけです。

もちろんこの実は、試験に合格するとか、お金持ちになるとか、有名な人になるとか、何かの賞を取るとか、物事上手く行くとか、病が癒されるとかというものによって押し量れるものではなく、もちろん、こういう「恵み」を神さまが与えて下さるのも事実だと思いますが、これらのようなことを「実」と表現したことは、神さまも、イエス様も、聖書も一度もないことを発見します。

そういうことを「実」だと思ってしまいがちな私たち自身をも発見してしまいます。

Part Three

では何が実なのか？

ガラテヤ書5章ですね。

ガラテヤ人への手紙5：19－26（パウロ）

肉に関することは、「肉の実」とは言わず、「肉のわざ」と言い、御霊、聖霊なる神によるイエス・キリストの私たちへの内在によって成されることは、「わざ」とは言わず、「御霊の実」と言います。

「わざ」とは、私の修練や行いによって成すもの、成さなきゃならないもの、成すべきことに用いる言葉ですが、「実」とは、桜の木が桜の花を咲かせるように、りんごの木がりんごの花を咲かせるように、みかんの花がみかんの花を咲かせるように、至って当たり前のことで、その存在そのものが、「実」の理由となるということですよね。

つまり、「実」とは、「しなければならぬ」ではなく、「そうしたい」と思えること、桜の木が桜の花を咲かせたいと思うように、りんごの木がりんごの花を咲かせたいと思うように、みかんの木がみかんの花を咲かせたいと思うように、光という事実が、「御霊の実を实らせなければ」じゃなく、「御霊の実を实らせたい」と思えるようになる。

「愛さなきゃではなく、愛したい」と、「赦さなくちゃではなく、赦したい」と、「喜ばなきゃではなく、喜びたい」と、「祈らなくちゃではなく、祈りたい」と、「礼拝しなくちゃではなく、礼拝したい」と、「光ゆえにそうなんだ」ということです。

自分ばかりか、人に対してもそうですね。

「こうしない、ああしない」ではなく、自分が光となって実を实らせることが決まっているように、「この方も、光となって実を实らせることが決まっている」と、待つことが出来るということなんだと思います。

だから、25・26節で、こう言っているんだと思います。

ガラテヤ人への手紙5：25－26（パウロ）

『時に適って、実が実るから、成果主義的なさばき合いは辞めたい』と思えてくるのが、何と感謝なことでしょう」と、使徒パウロ先生の恵みの分かち合いのような言葉に見えてきます。

Conclusion

光となって結ぶ実は、実のところ、クリスチャン達だけのものだったり、ためだったりするものではなく、世の中皆が共通に求め、「そうありたい」と願っている実だと思います。

そんな実を結ぶことが決まっているというところに入れられ、新しく造りかえられたという事実、存在そのものを主にあって振り返りつつ、力みを削って頂ける歩みを歩ませて頂きたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書5：9